

自慢の品格

菅原伸郎

善財

南無

名古屋に向かう新幹線の中で、数

学者・藤原正彦さんのベストセラー

『国家の品格』（新潮新書）を読んで

みた。なるほど、書き出しから快刀

乱麻、絶好調だ。もともとは文化水

準も低かった欧米が先に産業革命を

迎え、その近代合理精神が品格なき

祖国にしまった……といった趣

旨である。

たしかに、電車の中で若い娘が化

粧をしていたり、頭の薄くなった中

年男が漫画週刊誌を開いたりしてい

るのを見ると、何とまあ、情けない

社会になったことよ、と思ってしまう

う。読みながらうなずき、快哉を叫

んだ読者はさぞ多かつたろう。

随所にユーモアもあり、夫人には

「話の半分は誤りと勘違い」とから

かわれるそうさ。本人は「まったく

そうは思わない」と胸を張っている

が、肩のこらないエッセイという感

じではある。わざわざもの申す必要

もないだろうが、二百万部も売れて

いるとなれば、気になる点を少しだ

け指摘したくなつた。

たとえば、宗教改革者カルヴァン

の「予定説」について《極悪非道の

者でも、救済されることになつてい

る者は救済される、というのは理解を絶します》と首をかしげている。

それはそれとして、続けて《仏教の方では基本的に、善をなした人と

か、念仏を一生懸命に唱えた人だけが救済されるという、理解しやすい

因果律だからです》と紹介したのは

どうだったろう。

私の知る限り、いわゆる勧善懲悪

は儒教の発想だ。大乘仏教は「一切

衆生悉有仏性しゅじょうしつうぶつじょう」であり、やはり極悪

非道の者が救われる可能性を教えて

いる。「念仏を唱えた人だけが救済

される」のは自力であつて、浄土真

宗の他力本願とは正反対だ。筆者は

どうも『歎異抄』の《善人なおもて

往生をとぐ、いわんや悪人をや》と

いう言葉を忘れていろいろらしい。

もちろん、会社は株主よりも従業員のものだ、愛国心という言葉は手あかにまみれている、といった主張には同意したい。国際人を育てたいのなら、小学校で英語を教えるよりも日本語や伝統文化をしっかり、という意見にも大賛成である。であればこそ、仏教をもっと論じてほしかった。源氏物語や方丈記を大切に思うなら、その背景にある仏法を書いてもらいたい。こちらはたしかに外来思想だが、日本で成熟したともいえるし、何ととっても島国の枠を超える普遍性がある。

著者はしきりに武士道精神を持ち上げ、独立不羈^{ふき}、高い道徳、そして美しい田園を取り戻せ、と説く。しかし、権威に弱かった武士階級の倫

理にいま、どれだけ期待できるだろう。新渡戸稲造の『武士道』にしても、もともとは米国人に向けたお国自慢であり、そのマイナス面は語っていない。本来なら、背後にある禅仏教も語るべきだったのに。

『国家の品格』を読み終えて、私は本居宣長の随想「玉勝間^{たまかつま}」を思い出した。「徒然草」の一三七段で《花はさかりに、月はくまなきをのみ、見るものかは》と無常が語られることに對し、厳しく《さかしら心の、

つくり風流にして、まことのみやびごころにはあらず》と批判した箇所である。「古事記伝」を書いた宣長にとつて、儒教や仏教は嘆かわしい「からごころ」だったのだ。その分かりやすい主張は一種のポピュリズムであり、平田篤胤^{あつたぬ}を経て尊皇攘夷や国粹主義にもつながっていく。

しかし、宣長の仏教理解は怪しいものだった。哲学者の梅原猛さん『地獄の思想』（中公新書）で《仏教についてあまりに無知であり、ごく常識的に理解し、その常識にもとづいて仏教を批判した》と皮肉っていた。お国自慢は足元を固め、ほどほどにしておくべきものらしい。

（すがわら・のおお／

東京医療保健大学教授）

